果を示すことは誤解を招きかねないだろう。また、デートDV被害経験とジェンダー規範について、身体的暴力被害経験が「男性が女性をリードすべき」という規範の否定に影響を持つ、等の関係が見出されているが、そもそも被害経験とジェンダー規範がどのようなメカニズムでつながりうるのかという理論的検討が不在のまま変数間の関係を解釈することには無理がある。性被害経験と他の変数との関係をみることは、結果として〈被害者像〉の構築にもつながりかねず、

■ 書 評 ■

井上慧真 [著]

『若者支援の日英比較：社会関係資本の観点から』

被害者支援の観点からすれば厳に慎重を期すべきである。

われわれはなぜ「青少年の性」に視線を注ぐのだろうか。本書全体を通して受けた印象は、青少年の性行動の変化よりも、青少年の性を把握しコントロールしようとする社会的関心の「変わらなさ」である。なんのために「青少年の性」を明らかにしようとしているのか、改めて問われなければならない。

◆ A5判 288頁 本体6,500円
ミネルヴァ書房 2018年3月刊行

国立教育政策研究所 卯月 由佳

本書は、日本とイギリスの「成人期への移行」支援の共通性と差異を、支援の担い手の役割と社会的ネットワークの形成に焦点を合わせて検討した、著者の博士論文がもとになっている。学校を出て労働市場に参入したり、親元を離れて世帯を形成したりという「成人期への移行」過程にある若者への支援は、どちらの国でも民間団体を含めた様々な主体により実施されている。だが、社会的に不利な背景をもつ若者ほど支援を必要とするため、公的な、すなわち「政府・地方自治体が予算・運営に参画する」(p.2)支援の重要性が高まっている。そこで本書は公的な「成人期への移行」支援に注目する。具体的な比較対象は、日本の地域若者サポートステーション(サボス

テ)事業と、そのモデルとされたイギリスのコネクションズ・サービスである。

サボステ事業は、コネクションズ・サービスがそうであったように、若者の個別ニーズに対して継続的に支援することを目的に掲げ、職員と若者の1対1の相談を支援の基本とする。しかし、サボステ事業では、個別相談に加えて集団での活動も行われ、利用者が継続的に集まってコミュニケーションを取る機会が設けられている。また、各地域で利用者が就労体験、その準備的な活動、地域活動などに必要に応じて参加するための社会的ネットワークも開拓されている。

サボステ事業の枠組みの中で、個別相談と集団活動の両方が行われることの意義は何だろうか。本書は「成人期への移

行」につまずく若者の課題を、リンの社会関係資本の概念に依拠して「異質的相互行為へのアクセスの困難」と「同類的相互行為の道具的限界」であると捉え、サボステ事業がこれらの課題をどのように克服しようとしているか分析する。若者は、若者同士で居場所を共有して人間関係を築くといった同類的相互行為により自己肯定感を回復することもあるが、それだけでは外部社会に接続できない。自ら持ち合わせていない資源を豊富に持つ職員や様々な社会的ネットワークとの異質的相互行為にアクセスする必要がある。しかし、自信のない若者にとって異質的相互行為へのアクセスは難しい。そこでサボステ事業では、若者が若者同士の集団活動を通じて自らの強みについて承認を受けるとともに、他方で職員の助言を受けて自らを否定的に見る価値観を相対化し、より肯定的に見る価値観を獲得するといった、一歩踏み出すための仕掛けが用意されている。

コネクションズ・サービスでも、「成人期への移行」支援として社会的ネットワークは重視されていた。コネクションズ・サービスの特徴の1つは、相談を担当する職員として配置した、一定水準以上の職業資格をもつパーソナル・アドバイザー（PA）である。PAは地域に点在する「成人期への移行」に役立つ社会的ネットワークを網羅的に把握し、個々の若者をそれらの支援へとつなぐことが期待された。そのため従来こうした役割を果たしてきたユースワーカーからもPAは募集された。しかし、政府の構想は、個々の若者の情報把握や監督に重き

を置き、特にリスクの高いとされる若者を優先する点で、ユースワーカーの価値観とは対立する部分があった。また、PAには職業資格が求められたため、有志として活躍していたユースワーカーはコネクションズ・サービスには携われなかった。こうした状況から、コネクションズ・サービスでは地域の多様な社会的ネットワークを十分に活用できなかったという。本書は、イギリスで19世紀からの歴史があるユースワークとその担い手であるユースワーカーに紙幅を割き、ユースワーカーの専門職化とそのジレンマについても追っている。

これらの本書の知見は興味深く、政策や実践の改善に向けても、社会関係資本の理論の修正に向けても、示唆がある。若者の抱える課題が多様になればなるほど、画一的に対応するのではなく個別の課題把握から出発することが重視されるようになっているが、個別の課題の克服にも社会的ネットワークの活用が求められる。そのとき個人と社会的ネットワークをつなぐ担い手の役割は、職員の職務として政策的に言語化できるようなものだけではなく、担い手の経験知や裁量による調整が必要なものも多いだろうと考えさせられた。また、社会的ネットワークへのアクセスを可能とする条件について、若者の心理的障壁とその段階的な克服の状況に目配りした上で、本書はリンの理論を精緻化する必要性を指摘している。

本書の学術的な目的と貢献として著者自身が打ち出したかったことを理解するのに、序章はもう少しわかりやすく書か

れているとよかった。コメントを3点述べたい。まず、日英比較という方法についてもう少し議論がほしかった。何が公的に行われるかは各国の「成人期への移行」支援の全体像とも関係する。全体像との関係において、国際比較の対象を公的な支援に絞ることでは何が明らかにされ、何が捨象されるか、整理があると望ましい。また、コネクションズ・サービス終了後の2010年代のイギリスの公的な支援を、コネクションズ・サービスをモデルとしつつ別様に展開した日本のサポステ事業の比較対象には含めなかったことについて、説明があるとよかった。次に、社会関係資本の理論を有効な分析視角とする理由についても議論がほしかった。本書がリンの理論に依拠するのは理論的

■ 書 評 ■

知念渉 [著]

『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』

日本大学 仲野 由佳理

〈ヤンチャな子〉と呼ばれる少年たちは、どのような学校生活を送り労働市場へと参入していくのか。本書は、メディア・ストリート空間、学校空間、社会空間という重層的な力学による影響のもとで〈ヤンチャな子ら〉がたどる多様な生活実践を記述・分析している。イギリスの社会学者ポール・ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』に着想を得たという本研究は、〈ヤンチャな子ら〉の生き方から日本の社会的再生産の一端を描き出すという目的を見事に成功させている。

なレビューの成果というより、事例と理論の間の思考の往來の成果ではないかと、第5章のサポステの事例研究から推察された。仮にそうだとすれば、その思考過程が論じられると、コールマン、ブルデュー、パットナムの理論のやや並列的な紹介よりも有意義だったはずである。最後に、本書は日英の共通性と差異を明らかにすることで、その先にあるどのような問いに答えようとしていたのか。その水準のリサーチクエストが提示されると、いくつもの読みごたえある考察がより読者に伝わりやすくなると考えられる。

◆ A5判 234頁 本体3,800円
晃洋書房 2019年3月刊行

十年に及ぶフィールドワークを通して、「ヤンキー」という一つのフレームで単純化されがちな〈ヤンチャな子ら〉の、その内部にある階層性・複数性、そして「社会的亀裂」が描かれている。

本書の構成は以下の通りである。序章は、著者が〈ヤンチャな子ら〉に関心を持つに至った経緯と本書の目的・独自性が説明されている。第1章では、先行研究が（ヤンキーに対して）「安定したライフサイクルを想定し、その外側にある学校経験や階層文化との関係をほとんど